

2012年12月10日

博報堂、食料ロス・廃棄問題の解決を目指す共創型プロジェクト 「フードロス・チャレンジ・プロジェクト」を発足、参加企業を募集開始

多様な領域の関係者が集まり、全体視点から課題解決のアクションを創出
博報堂開発のマルチステークホルダー共創プログラム『bemo』の手法で推進

株式会社博報堂（東京都港区、代表取締役社長：戸田裕一）は、まだ食べられる食料がバリューチェーンの各段階においてロス・廃棄されている問題（＝フードロス）の解決をテーマとした「フードロス・チャレンジ・プロジェクト」を発足させ、参加企業・団体の募集を開始いたします。2012年12月末までを第一次募集期間とし、2013年1月よりプロジェクトを本格的に開始する計画です。

当プロジェクトは、「フードロス」という共通のテーマのもと、生活者や企業、生産者、NPO、学識者などの多様な領域の関係者（＝マルチステークホルダー）が、知恵やリソースをそれぞれの専門領域から持ち寄り、自分たちの社会に必要な仕組みを共に考え、共に創る「共創型プロジェクト」です。農業・漁業生産、加工メーカー、流通、小売などの“食のバリューチェーン”に関わるさまざまな企業や組織と、食に関する専門的知見を有する行政、NPO、大学などの各種関係者が一堂に会し、フードロス問題の構造を全体的な視野から把握し、対話を重ね、課題解決のためのアクション創出を目指します。

プロジェクトの実行委員会は、大軒恵美子氏（国連食糧農業機関（FAO）日本事務所企画官）、世界の飢餓問題の解決を目的に活動するNPO法人ハンガー・フリー・ワールド、社会システムのデザインを研究する慶應義塾大学システムデザイン・マネジメント研究所ソーシャルデザインセンター等を中心に編成します。博報堂は運営事務局として、プロジェクト全体のコーディネート、ファシリテーションの役割を担います。

なお、当プロジェクトは、博報堂が開発した「マルチステークホルダー乗り合い型価値創造プログラム『bemo』（ベモ）」の手法を用いて推進します。『bemo』とは、一組織・一企業単位では解決できない社会課題に対し、関係するマルチステークホルダーが共創的に取り組むことで、システム全体を改善しながら、それぞれのステークホルダーにも利する事業モデルを生みだそうとするプロジェクト手法です。各関係者が集い、社会課題を“システム”として捉え、全体視点で共有することで、一段視座の高い解決策やアイデアの創出を可能にしていきます。（※『bemo』の詳細はp4に記載）

生産から消費までの各段階が複雑かつ密接に影響しあっている「フードロス」の問題に対しては、マルチステークホルダーで取り組み、システム全体を学ぶことを通じてこそ、新しく生まれる解決策やイノベーションがあるはず、と私たちは考えています。

◆「フードロス・チャレンジ・プロジェクト」の特徴

1. 参加型・共創型アプローチによりソーシャルイノベーションを実現
2. 社会課題のソリューションを事業・ビジネスと結び付ける
3. フードロスに関する最新の情報とネットワーク

<http://foodlosschallenge.com/>



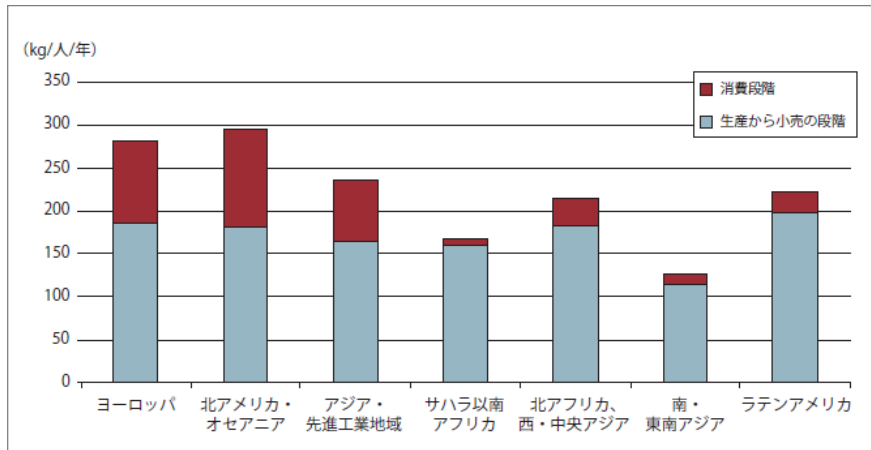
FOODLOSS CHALLENGE

参考資料1：フードロス問題とは

◆世界のフードロスの状況

「人が消費するために生産された食料の概ね3分の1が世界中で失われ、捨てられており、その量は1年あたり約13億トンになる。食料は、農業生産から世帯での消費に至るフードサプライチェーン全体を通して無駄にされている。」

これは、2011年に国際連合食糧農業機関（FAO）が発表した、世界の食料ロスと食料廃棄の現状です。¹



世界各地域における消費および消費前の段階での1人当たり食料のロスと廃棄量

◆日本のフードロスの現状とプロジェクトの問題意識

日本では、年間約1,800万トンの食品廃棄物が排出されており、このうちいわゆる「食品ロス」とよばれる「本来食べられるにも関わらず廃棄される量」は500~800万トンと試算されています。²

事業系廃棄物と区別した場合、家庭においては、一人当たり約15キログラムの食料を毎年無駄にしていることとなります。³

食料の生産から消費までには、大量の化石燃料や水・土地などをはじめとする自然資源が使われており、資源の有効活用や環境保護の観点からも、フードロスの削減に取り組むことは重要です。

生産・加工・流通・消費の各段階での無駄を削減し、効率化することは、生産者や企業・生活者へ経済的なメリットをもたらすことにもつながります。

そして、飢餓や栄養不良の課題を抱える世界でフードロスが発生しているという矛盾を放置すること、多くの人々の努力によって私たちへ届けられる食料を無駄にするということは、社会のありかたを歪めることであり、なにより「もったいない」ことだと思うのです。「食べもの」への感謝がきちんとある社会は、生きる基本や土台がしっかりしている社会なのだと思います。

このような社会課題の解決が難しい理由は、個人や個々の組織・企業が、大きなシステムに巻き込まれながらも同時に加担していることにあります。こうした生産から消費までの各段階が複雑かつ密接に影響しあっている問題に対しては、マルチステークホルダーで取り組み、システム全体を学ぶことを通じてこそ、新しく生まれる解決策やイノベーションがあるはず、と私たちは考えています。

¹ FAO「世界の食料ロスと食料廃棄」 http://www.jaicaf.or.jp/fao/publication/shoseki_2011_1.pdf より

² 平成21年度農林水産省推計より

³ 消費者庁「食べものムダをなくそうプロジェクト」ウェブサイトより抜粋 http://www.caa.go.jp/adjustments/index_9.html

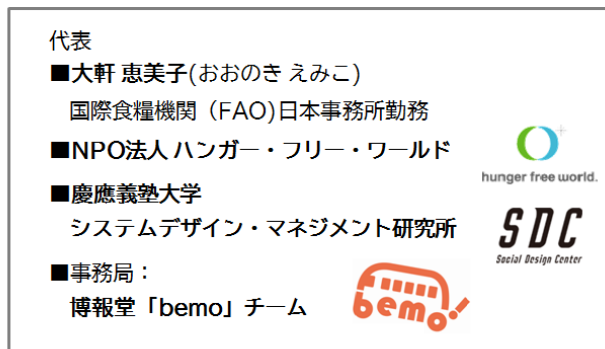
参考資料2：「フードロス・チャレンジ・プロジェクト」について

① プロジェクトの特徴

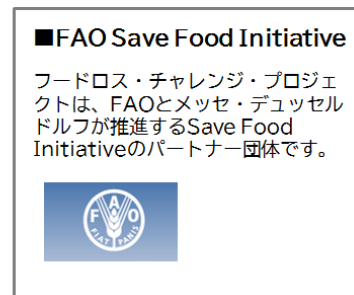
1. **参加型・共創型アプローチによりソーシャルイノベーションを実現**
 - ・生活者・企業・行政・NPO・学識者等による「ホールシステムアプローチ」
 - ・システムシンキング、デザインシンキング
2. **社会課題のソリューションを事業・ビジネスと結び付ける**
 - ・社会的課題を社会の深いニーズとしても捉える
 - ・システムの変革を、新たな事業モデルが生まれる機会と考える
3. **フードロスに関する最新の情報とネットワーク**
 - ・海外・国内の最新情報
 - ・行政・NPO・シンクタンク・大学等のネットワーク

② 実施体制図

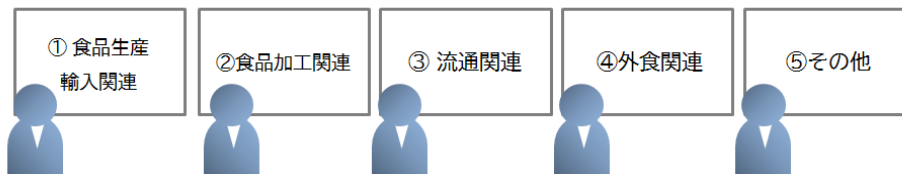
①フードロス・チャレンジ・プロジェクト実行委員会



②情報交換・連携



③参加企業(想定)



③ プロジェクトのステップ

さまざまな参加者（マルチステークホルダー）がひとつのチームとなって、生産から製造・加工・流通・消費にいたるさまざまな現場を共に訪れ、見つめ直し、対話を重ねた上で「フードロス」という問題の全体構造を把握し、新たなプロジェクトやソリューションを創出していきます。

【Step1】 フードロスに関する知識のインプットと共有

有識者による視点、海外動向、既存の活動などをカンファレンス形式で共有。さらに、生産・加工・流通・消費のシステム全体をツアーで体感し、理解を深める。チーム全体でビジョンや問題意識を共有し、個々の参加者だけではそれまで見えていなかった“全体”に視野を広げる。



【Step2】 マルチステークホルダーでの対話

現場で得た知識をベースにマルチステークホルダーで対話を重ねる。



【Step3】全体システムを構造化

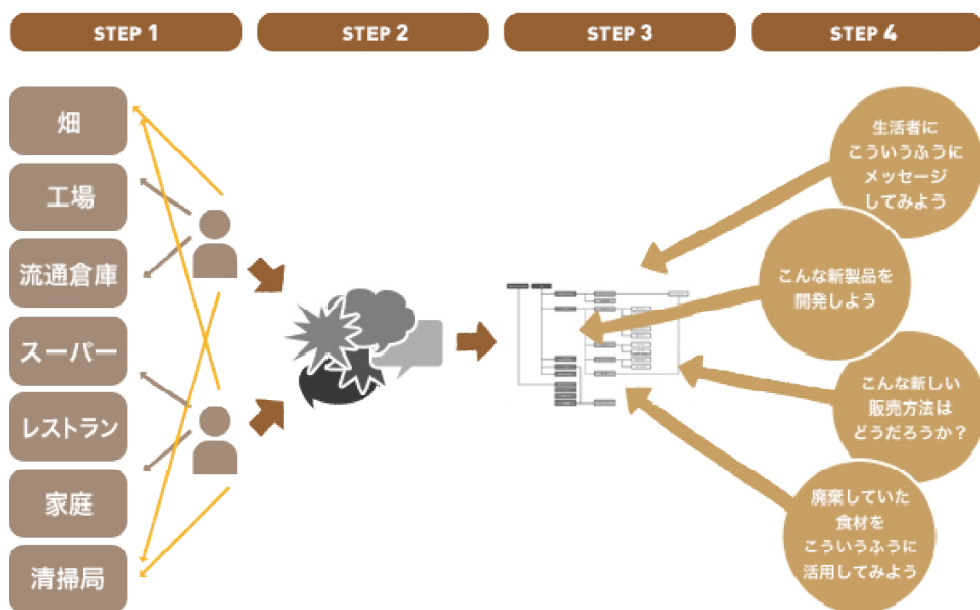
システム・シンキングなどの技術を用いながら、体験と対話から得られた学びや発見、発想など、フードロス問題の全体システムを一枚の構造図にまとめる。



【Step4】アクション設計

構造図をもとに、フードロスを生み出すシステムに介入するアクションを設計。個々の主体に戻って取り組むアクションや、多主体の連携で取り組む具体的なアクションを設計する。

(新たな販売方法、新たな廃棄食材の活用方法、新製品開発、生活者コミュニケーション…etc)



④ 博報堂「bemo」について

マルチステークホルダー乗り合い型 価値創造プログラム



『bemo (ベモ)』とは、一組織・一企業単位では解決できない社会課題に対し、関係するマルチステークホルダーが“乗り合い型”のチームを結成し共創的に取り組むことで、システム全体を改善しながら、それぞれのステークホルダーにも利する事業モデルを生みだそうとするプロジェクト手法です。各関係者が集い、社会課題を“システム”として捉え、全体視点で共有することで、一段視座の高い解決策やアイデアの創出を可能にしていきます。

今回の「フードロス」に代表されるような、食、環境問題、医療、教育など、問題が複雑で解決が難しいが、解決しなければ社会全体に影響するようなテーマに適しています。都市のブランド構築などでも、複数の成功実績を有しています。

ソーシャルテーマに関する豊富な実践経験を持つ博報堂社内のコンサルタントチームが、「競争から共創」を掲げ、新しい時代の価値創造を目的に活動しています。

(チームリーダー：兎洞武揚 うどう・たけあき 博報堂ブランドデザイン 組織変革ファシリテーター)

※詳細は 2011 年 8 月 10 日付ニュースリリースを参照ください。

<http://www.hakuhodo.co.jp/uploads/2011/08/20110810.pdf>



読みやすさを追求した書体を使用

⑤ 「フードロス・チャレンジ・プロジェクト」への参加方法

◆企業・団体の方

・ウェブサイト、公式 Facebook、下記の間合せ先等から参加申し込みをお願いいたします。

※一次締切：12月末日

（締切を延長する場合がありますが、2013年1月にはプロジェクトを開始し、同月下旬には「【Step1】知識のインプットと共有」のカンファレンスを実施いたしますので、お早めのお申し込みをお願いします。）

◆一般生活者の方

・今後、公式 Facebook 上で、一般生活者の方にも発言していただいたり、プロジェクト活動に参加していただく仕組みを設ける予定です。

◆プロジェクトの概要、参加方法などの詳細

- ・「フードロス・チャレンジ・プロジェクト」ウェブサイト
<http://foodlosschallenge.com/>
- ・公式 Facebook ページ
<http://www.facebook.com/FoodlossChallengeProject>
- ・お問合せメールアドレス
info@foodlosschallenge.com
(※広報窓口へのお電話での申し込みも受け付けております)



FOODLOSS CHALLENGE